

今回は、本学で書籍や論文の出版点数が一、二を争う日本経済史の今西一先生にお話を伺いました。自宅、研究室、ゼミ室、二つ倉庫が、寝る場所以外は本でいっぱいという野武士のような生活を送られている先生です。

# 私にとって 学問とは徹底した 資料調査、 実地調査です

いまにし はじめ  
今西 一 教授

経済学科 / 農学博士・日本経済史担当  
1972年3月 龍谷大学文学部卒



- それでは、今回は、小樽商科大学が誇る歴史研究者であられる今西一先生をお迎えして、インタビューを始めたいと思います。まず、ご幼少の頃のことをお聞かせください。

私は祇園祭で有名な、京都市東山区に生まれました。

- 今西先生の雅な雰囲気は、ご出生の良さからきているのですね。祇園祭といえば、確か、先生は、従三位の位をお持ちだとか？

5歳か6歳のとき、祇園祭のお稚児さんをやったので、そのときに従三位の位をもらいました。これは御所に入るために必要な位だったのです。

- 私も長らく京都に住んでいましたが、ついに御所の中には入る機会に恵まれませんでした。その意味で、先生は選ばれた人だったわけですね。

いやいや、そんなことはありません。祖母が高いお金を寄付したんだと思います。

- でも、先生が学生時代を過ごされた時期には、学生運動などが盛んな時期だったのではありませんか。京都の街は騒然としていたのではありませんか？

政治の季節ですから、何らかの意味で学生運動にかかわらなかった学生の方が、少なかったと思いますよ。

- なぜ学生運動や社会科学に興味を持ったのですか。

私の生まれ育った地域は、祇園と「同和地区」のちょうど中間にありました。友人にも「同和地区」出身者が多く、本当の貧しさをいうものを目のあたりにしていましたからでしょうね。それに私の家も、父が事業に失敗して貧しい暮らしでしたから。しかも小学校の先生たちが、住井すゑさんの『橋のない川』などを読ませてくれました。

- いわゆる「義憤にかられて」ということですね。マルクス主義の影響は、ずっと続くのですか。

いや、大学を卒業して、京都大学農学部農林経済学科の農史講座の研修生になった時、当時、京大農経には、三好正喜先生といわれる方がおられました。先生のゼミで講読する文献に、マルクスやエンゲルスの『資本制生産に先行する諸形態』や『ドイツ農民の歴史』などをあげたところ、「何で、そんな間違いだらけの本ばかり読むのか？」と、あっさりと否定されてしまったのです。先生は、ちょうどドイツ留学から帰国されたところで、向こうで実証主義研究の方法をたたき込まれて帰ってきたばかりでしたから。先生は私に、ドイツ実証主義で有名なアーベルなどのドイツの農業史を読むように薦めてくれました。それが、実証分析に入った最初でした。それから20代、30代は近畿地方の農村に入って調査に明け暮れていたのです。

- いい先生に出会われたのですね。

ええ、でも実際に農村に入ってみると、人民闘争史などの資料とかはまったくなくて、伝票とか帳簿しかないんですよ。いろいろと理屈の話をする前に、こういったものをきちんと分析できる能力が必要だと、痛感したのです。

- 今西先生は、基本的には幕末から明治維新期の専門家ですが、歴史全体に通じておられますよね。

恩師の一人 京大農学部三橋時雄先生が、そういう方だったのでその影響でしょう。それと、長く定職が無く、高校や予備校で歴史の講師をやっていたので。その講義をするために、日本史全般にわたって勉強したのがいまに至っています。予備校などには、優秀な東洋史・西洋史家が講師に来ていて友人になりましたから、その人たちからも多くを学びました。

- 先生は長く在野におられたようですが。

大学院に進学したり、研究者になること自体に否定的でしたから。業績目録には載せていませんが、20歳前後は文学評論などを書いていました。

- でも、生活は楽しなかったと思われそうですが、そのなかで学位論文は書かれておられますね。

20代、30代を通じて、徹底的に資料調査、実地調査をやり、それを集大成したものが、学位論文となりました。

- それが最初の御著書『近代日本成立期の民衆運動』ですね。しかし、あの本が特徴的なのは、他の本と比べて最初に、方法論を長々と説明しているところですね。

それは農業史という研究対象の特徴でもあります。農学研究っていうのは、まず最初に分析する対象があって、それに対してどのようなアプローチをとるか、ということが問題となるのです。だから、京大の農学部の研究会には、社会学、歴史学、あるいはマルクス経済学や近代経済学の研究者が一堂に会して、議論を重ねるなどという光景がよくみられました。これは他の分野ではあまりないことではないでしょうか。だから、本の最初で、どのような方法を用いて問題を考えるか、ということ宣言しておく必要があった